



Title	英語音調論研究
Author(s)	成田, 義光
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32256
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	成 田 義 光
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 4 4 3 8 号
学位授与の日付	昭和 53 年 12 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	英語音調論研究
論文審査委員	(主査) 教授 毛利 可信
	(副査) 教授 山川 鴻三 教授 宮地 裕

論文内容の要旨

本論文は言語を過程的構造にとらえ、超分節要素としての音調(強弱、区切り、高低)は、Austin らの発話行為論や Grice らの対話の原理などを考慮しつつ、語用論的に研究すべきであるとして、独自の方法を提唱したものである。「序」、第一部「序説」(第一章——第二章)、第二部「英語音調論」(第三章——第五章)、および「付、英語韻律法の一側面」から成る。

第一章「言語能力」では、音調は発話(行為)の種類を明確にし、話者のいとなみを伝達ないし喚起するための言語化の過程に参与するものであるとして、これを言語的要素と認め、また声調すなわち囲気を超言語的要素として認めるという立場を明らかにしている。言語の習得に関しては、従来、これを習慣形成的なものとする経験論の立場と、これを仮説検証的なものとする合理論の立場とがあったが、ここでは「子供は模倣しつつ創造する」という総合的立場をとり、さらに分節要素にあっては、子供の喃語期と言語音期とは直接連続しないが、超分節要素にあっては、それが連続していることを重視する。言語を単なる伝達手段とみるときは、発話自体は trivial であるとの見解におちいりやすい。文を発話する行為自体がそこに意味された行為であるような、いわゆる遂行文の存在は、言語を伝達体系とみることを要請する。Chomsky でさえも、はじめの限定された言語能力の概念を拡充して、場面適合性をも考慮した新しい言語能力を認めたのであった。このようにして発話行為という観点からの言語研究の重要性を明らかにし、音調もこの見地から研究すべきであると論じている。

第二章「言語理論」では、言語の三つのレベル、〈音声、文法、意味〉の位置づけと相互関係について述べている。言語の基本は音声であるが、音声優位ということに不当に固執すれば、Palmer, Sweet, Bloomfield にみるごとく、あるいは言語音を物理的、生理的な音と混同し、あるいは音韻音

素論を自律的体系とみるような謬見におちいりやすい。発話行為を実現するものとして発せられる音声は、言語の要素であり、意志的 (voluntary) で有意的 (meaningful) なものである。さて、上記の三つのレベルの相互関係については、

- a. 音声 → 文法 → 意味
- b. 音声 ← 文法 → 意味
- c. 意味 → 文法 → 音声

の三つの見方があるが、aは音声優位論者の立場であり、bは、与えられたものとしての統語構造を手がかりとして音声を論じ、かつ文意を解釈するという立場である。著者はa、bを批判し、cの立場をとる。すなわち、cは言語化の過程を示すもので、ここではレベルの分離は必要でなく、むしろ、これによって、レベル間の相互依存、相互浸透などの現象を説明できる。Are they married? — Yes, happily. において、答の文は、最終部分の音調により意味が異なるが、このことは音調の指定は削除変形に先行することを示す。ただし、cで、音調は統語構造に依存するというよりは、むしろ、それを発話として調整する機能を持つものであると指摘している。

第三章「文強勢」 本章以下、音調というときは、これを狭義の音調、すなわち、音の高低による抑揚 (intonation) の意味に用いる。強勢と音調とは多くの場合に相関関係にあるが、Really! / Really? のように、強勢は同一で音調のみを異にする場合もある。また語強勢と文強勢について、前者は語に固有であり、後者は文に固有でないとする説もあるが、これは必ずしも当てはまらず、著者はこの両者を階層的な関係にあると考える。強勢と音調との関係については、dancing girlの二義性や、greenhouseとgreen houseとの区別にみられるように、compound ruleとnuclear stress ruleの問題が重要である。英語のリズムは弱強型(iambic)を基調とするもので、それは日本語の七五調のリズムとは異質なものである。無標の文においては、内容語 (content word) ごとに強勢をおくことにより、弱強型のリズムを生じ、その強勢のうち最後のものが第一強勢、他は第二強勢となる。典型的な文は次のように発音される。

The tēacher gāve the stūdent a flōgging.

また有標の文にあっては、前提要件 (presupposition) と焦点 (focus) の移動に従い、焦点に第一強勢がくる。とくに重要な例を示せば、John hit Bill and then Māx hit him (=Bill). John hit Bill and then Max hit hīm (=John). / John washed the car. I was afraid someone else would do it. において、第一強勢がafraidにあるときと、それがelseにあるときとの区別 / Helen left directions for George to follow. において、第一強勢がdirectionsにあるときと、それがfollowにあるときとの区別、などである。

本章において著者が力説していることは、もしも言語を排列的構造と考え、上記bのような立場をとるならば、それは、深層構造から変形を経てできた表層構造の復元可能性の問題にかかわり、それが復元不能の場合、それは解釈不能ということになるであろうから、従って、cのように、言語を、発想から発話行為に至る過程的構造とみなしなければならない、ということである。このあと、音の弱化ならびに縮約形について論じている。

第四章「区切り」では接続(junction)がどのように発音の仕方や語形成にかかわるかということを論じている。主要な論点は次のようである。

同一語根の語であっても、強勢の移動により音節区分を異にすることがある。例：mín·uteとmi·nūte；próg·ressとpro·gréss/ungentlemanlinessなどの語形成における接辞付与の入子型順序/undoableの二義性と強勢との関係/He will act roughly in the same manner.において、tとrとの接続がsharpであるときとmuddyであるときとの区別。これはnight ratesとnitratesについても同様。/an aimとa name；that stuffとthat's tough；I screamとice cream；we'll ownとwe loanの発音上の区別。

接続の問題について、接続部分の時間的長さよりも、音節中心間の隔りに重きをおく離接的な考え方があることに注意し、著者は、区切りの機能を、統成的機能と分割的機能とし、最後に呼気群について述べる。

第五章「文音調」すでに第一章の後半において述べられているように、発話行為論の立場から、言語活動を、話者と聴者との間に行なわれる社会的協調のための行為と考えるとき、文音調が発話行為の種類(約束、質問、命令、勧誘、宣告、脅迫など)をあらわすことに関与するという観点からの言語分析の必要性は明らかである。

発話行為と統語構造との不一致は、修辞疑問文の場合や、疑問文を用いて勧誘をする場合にみられる。これらの場合を含めて、すべて発話行為の理解は、Friesのいう社会文化的意味として、また、GriceやGordon-Lakoffの提唱した対話の原理に基づいてなされるものである。

発話行為の種類は、遂行動詞(performative verb)を用いた遂行文によって明示的にあらわされる場合もあり、その他の形式の文によって潜在的なものとして暗示される場合もある。ときには、文中の助動詞や小詞によってそれがあらわされることもある。また、It's going to charge!は警告となり、—?とすれば質問となり、—!とすれば抗議となって、音調がそれぞれ異なるのであるが、この場合は音調が直接的に発話行為の種類をあらわしている。

音調の型は、有坂、Palmer、Armstrong-Ward、Lieberman、Hallidayらによって説かれてきたが、それらのいずれによっても説明できない現象もみられる。たとえば、「平叙文は降調、疑問文は昇調」というような単純な見方では、I don't lend my books to anybody.の二義が音調によって区別されることの説明ができない。この文は「完結性は降調、未完結性は昇調」という説によってならば説明できるが、その説でもWhere do you come from?が二通りの音調を持つことの説明はできない。のみならず、この点は両極性に基づくHallidayの説によっても説明不能である。

著者の立場では、文音調とは文末音調のことであって、いわゆる音調曲線によって形成される型のことではない。発話行為の種類をあらわすのに決定的に関与するのは、文末が昇調か降調かということのみであって、Palmerの6型でさえも最終的にはこの二つに集約される。発話行為は最終的に話者中心的なものと聴者中心的なものに分類されるものであって、前者の音調は降調、後者の音調は昇調になる。これに基づいて音調を次の二つとすることができる。

話者中心的音調 speaker-based tone

聴者志向的音調 hearer-oriented tone

この考え方により、Where did you come from? が昇調のときは、実質的に、Can you tell me where you came from? と同義とみることができる。後者は聴者志向型音調をとるのは自然なことである。ただし、一般疑問文（疑問詞を含まない疑問文）がすべて昇調をとるということではない。一部の学者は一般疑問文の昇調を、撰択疑問文の末尾の—or not?の部分の省略として説明するが著者はこれを誤りとする。Friesの調査によっても、一般疑問文2561例中、昇調は981例にすぎない。文音調を決定するのは、統語形式が平叙文、疑問文、命令文等のいずれであるかということではなくて、その文を発話することによって行なわれる発話行為が話者中心の行為であるか、聴者中心の行為であるかということである。いくつかの具体例を示すと次のようである。

Ring me up at eleven. 降調のとき命令、昇調のとき依頼。/Have you been to the zoo? 降調のときはTell me if you have been to the zoo. と同義。/Do you understand it now? 降調のときはyou ought to understand it now. と同義。/Good morning. 会ったときは降調、別れの挨拶は昇調。/I beg your pardon. 降調のときはPlease excuse me. と同義。昇調のときは I didn't hear what you said. と同義。/Thank you, dear. は昇調、Thank you, sir. は降調。

付録の「英語韻律法の一側面」は詩行の解釈に関して英語学の立場から寄与できる面があることを実証したものである。具体的には、Keats, 'To Autumn' 中の1詩行をめぐる、小川一御輿論争（1972）について、Halle-Keyserの理論の援用による解決法を提示したものであって、それなりに評価し得るものではあるが、本論と密接に関連しているとはいえない。

論文の審査結果の要旨

前述の通り、本論文は発話行為的発想を音調論に適用することを目的としている。従って、その結論部分において、「話者中心」、「聴者志向」という観点が導入されたのは、その試みが集約された形であらわれたものと考えることができる。発話をそれぞれの場面ないし文脈においてとらえるとき、話者および聴者の存在ならびに両者の関係が言語分析の重要な要素となることは当然であり、この点を重視した学者も少なくない。たとえば、Gardinerはこの方面の先駆者であり、Gordon-Lakoffは、対話の原理の面で'speaker/hearer-based sincerity condition'を論じ、Formanは、命題に関して'speaker/hearer proposition'の区別を考えている。しかし、これらはいずれも分節要素について述べたものであるのに対し、本論文の著者はこのような考え方を発展させて、これを超分節要素に及ぼすことを提唱し、それが有効であることを具体例について例証した。そして、これによってあるいは従来の学説を正し、あるいはその不備を補うことが可能であることを例証している場合も二三にとどまらない。しかも、立論にあたっては広く内外の文献を参照し、かつこれを十分に消化し、そこから導き出された新しい考え方を簡潔明快な文にまとめたもので、この点で著者の功績は十分に認めることができる。

しかし、一方、本論文について不満や疑問が全く感じられないわけではない。第一に、論文の後半から結論部分にかけて、提案した事項についての展開や例証がやや不足しているように思われる。独自に採集した、もっと多様な例文について縦横に論ずるところがあったならば、さらに説得力を増したであろう。第二に、著者の立場では、文末音調のみが重視され、その他の部分の音調は軽く扱われている。たしかに、話者と聴者とが入れかわるさいの音調など、文末の音調が決定的な意味を持つことが多いのではあるが、発話の途中でも感情の起伏等が微妙に影響し合うことも多いはずであるから、いわゆる音調曲線による型についても、ある程度掘り下げた議論がなされるべきであった。

さらに細かい点をあげれば、p.125のdancing girlの二義性と音調の分化を論じた所では、まず、この語句が果して適例であるか否かの問題がある。たしかに、この例はFriesも用いているけれども、girlでは、その二義性が明白な対照をなさないために、ここの論旨がやや不徹底なものとなった。ここでは当然dancing teacherを例示すべきであった。また、この部分では、第一強勢（・）の第二強勢（ゝ）のみを用いて強勢型の区別を論じているが、ここでも、p.264以下と同様に、第一強勢（・）、第二強勢（ゝ）、第三強勢（ゝ）として精密に論ずる方がまさっていたと思われる。

とはいえ、これらの諸点は、本論文全体の構成からみれば、末梢的な事項に過ぎず、立論の大筋に何ら影響を及ぼすものでない。よって以上を総合して、本論文は、学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する次第である。